

画した。そのとき提案されたほとんどすべてのテーマに対して、学級の二、三人のものからいつも「もう、ぼくらはそれを去年ならってしまった」という声が出た。教師は、提案されたテーマをおぼわすてしまおうとして発言を待ちかまえているのをたしなめて、こういったやり方に抗議する生徒といっしょに今までに学習してきたことは、もちろん、そのときにふれられなかった問題領域をもっとほりさげていくことを提案した。その教師は、「ある部分のことをよく知っている生徒は、学級の他のものの手助けをする専門家として役に立った。だが、その生徒は、他の部分では別の生徒から手助けしてもらった。だから、生徒集団の中に、この問題領域を以前既に学習したものがいるから、という理由だけで、その問題をその集団のカリキュラムからとりのぞくのはまちがっている」と、その結論を下した。

## 五 学校生活の統合

### 1 学校自治会

なんらかの形で生徒会をもたない学校は事実上まれである。それが生徒自治会であるばあい、教師はほとんどといってよいほど、それに参加しない。ところが、学校には、学校自治会とよばれ、生徒と教師の間の本当の協力関係をうちたてようとする、真剣なところをあらわすものもある。最悪の場合、生徒会は、どっちみち、指導的な生徒の小グループが衆目をあびる機会をもつ手段となったり、学校管理に必要な事務的、または管理上の仕事を無料でおこなう機関として、ただそれだけに奉仕させられることがある。学校自治会の最もよいことは、そこですべての生徒や教師が、直接的で、緊急な、しかも現実的な問題を把握し、研究し、決定し、実行にうつすことができることである。生徒自治会には、個人の尊厳とか価値にたいする尊重を、生徒のうちに発表させるより良い場が見

あたらないし、社会的参加の技術や、他人の福祉にたいする関係を指導するよい場所でもない。

生徒会に対するもっともな批判に次のようなものがある。

生徒会は生徒にとっても、教師にとっても参加できる広く十分な基盤がないということ。このことの大きな原因は、学校存立にかかわる種々の制約からきている。ある学校では生徒だけが、だれが活動方針をきめるか、だれが生徒の予算の分配をするかということの決定権をもっている。また他の学校では、生徒会は財政上の制限よりもむしろ知的な制限をもっている。一定の学年に選しない生徒は役目をもたないし、すくなくともある場合にはそれ相当の学年にならないと選挙権所有の資格をもてないときめている。この種の考えは、生徒会への参加が、体育と同様に生徒が本質の上無価値のゆえに学ぶことを欲しないものを学ばせようとする刺激になることを意味するようにも思われる。また組織的な学校自治会に参加することは、それ自体が学習であり、ときには教科書をマスターすること以上に重要かつ有意義であるという見方は間違っている。

生徒が参加する基盤が狭いという他の原因は、生徒会が意味のない事からを取扱うことにある。生徒会は、生徒の生活にも教師の生活にも関係のないこと、全体的な興味のないことをしていたのでは長続きしない。

「生徒会組織の特徴的な事実は、おとなの目的が支配的であるということである」と、生徒会の研究をしてきたケリーが報告している。すなわち、「多くの機関は、学校の福祉増進を考えるより数倍、生徒集団の福祉増進を考えている」と。リストにのっている目標の中には、生徒会の要求と必要が目につくが、生徒会が、おとながおとなの日からみでのみ価値ある仕事をするように、青少年を説得するような機構にすぎないという批判はあつてい

る。生徒会の活動が、おとなの活動だとするならば、その活動は民主主義の訓練としてのぞましいか、あるいはのぞ

ましくないかのいずれかである。重要なことは、(1)生徒が規約作成の仲間入りをする事、(2)生徒が教師のきめた目標を実現するための機構をつくり、そこに入りこむことである。

次に八年研究参加校の学校自治会から提出された仕事のリストをのせることにしよう。

- ・廊下を整備すること。
- ・遅刻した者を放課後のこす仕組をつくること。
- ・ホームルーム集会を監督すること。
- ・学校内外の交通整理。
- ・自動車の使用規定をつくること。
- ・あらゆる学校財産の状態にたいする責任をとること。
- ・研究室を管理すること。
- ・学校訪問者に対して主人として対応する。
- ・校報板についての責任をおうこと。
- ・廊下に行事を展示する計画をたてること。
- ・消防訓練を計画すること。
- ・安全運動・清掃運動を管理すること。
- ・職員の仕事計画委員会に仲間入りすること。
- ・学校の努力賞名簿を承認すること。
- ・職員のカリキュラム委員会に仲間入りすること。

- ・定例および臨時学校集会を計画すること。
  - ・生徒会の入会金および生徒会の予算の統制。
  - ・学校新聞・校誌・年報を発行、管理すること。
  - ・競技のプログラム作成の手助けをすること。および、その適否を認定、裁定すること。
  - ・スケジュールを認可すること・入場券販売を計画し管理すること。
  - ・慈善運動を指導すること。共同募金・赤十字募金等。
  - ・パーティーのような学校の社会的な計画を統制すること。
  - ・クラブ活動を監督すること。
  - ・アメリカの学生連盟のような学校内にある外部組織の支部を作ることを経営すること。
  - ・クリスマス・メーデーのような全学的な活動を計画すること。
  - ・アメリカ教育週間の計画を援助すること。
  - ・種々のクラブに学生の話し手を送りこむこと。
- これらの諸活動のあるものは明らかにとおとなによってきめられ、規約を管理しているにすぎないが、その他のものは、それでもまぎしく協同で承認し共同で運営されるであろう。
- 一般に、おとなはあまりにも青少年を失敗から守ろうとしすぎるといえる。学年に関係なく、報告にもかかわらず、このことは学級の備品についてもさういふことがいえる。この傾向は学校自治会においても同じことである。
- このことは、鋸の歯の鋭利さや危険なことを学ばせるには、一本や二本の指をもぎりとるようなことも、しかたがないという議論をしているのではなく、生徒が財政的な責任をもつ以上、成功するか失敗するかの結果は、彼ら

自身がたどられなければならないことだ、という結論を認めよ、ということなのである。

たいていの生徒会活動は教科外課程とみなされている。そこで、生徒会の責任・問題・成功ということが学級に浸透しないばかりか、悪いことには、これらの生徒会の責任・問題・成功ということが生徒の日常生活に入りこんでいかなのである。生徒会の役員は学級でなんらかの仕事をすることを期待されているにもかかわらず、七〇%のものは学級での役割を持っていない状態である。結局生徒会の仕事はそれが代表者だけのものになってしまつて、役員でも役員でない生徒にしても、日常生活の中にしみこんでこないのである。

また、多くの生徒会はあまりにも機帯にこだわりすぎて、生徒会がなしとげるべき目標に柔軟性をうしないがちである。ある学校では、生徒会に市民教育のモデルの役割を果させようとしている。また他の学校では、管理の目標を能率的に達成するためのものであると規定している。生徒会の目標を学校の能率的な管理というところにおいたばあい、それは役員だけの小集団をつくることになったり、かれらがその組織の運営をまなびとると、かれらをなかく、その役目につかせるという傾向がある。

ところで、学校自治会のどうにもならない形は、一方では教師の参加がまるでないもの、他は教師の一方的な支配である。興味を失わずに青少年の仲間入りができ、しかも彼らを抑えようとしないうとながいとすれば、それはりっぱなおとなである。だが、教師の負担を考えると、一瞬ホッとする機会に生徒集会の時間を利用する。だからといって教師を批判するのは酷である。しかしながら、生徒会顧問教師は一つの集会でもないがしるにしようとは思っていないし、また、多くの教師は論議が一般的に興味あるものならば、必ず出席するという事実は注目すべきことがらである。

解決の鍵は、学校自治会の役員会への教師の参加の枠をひろげること、顧問教師の責任の交代、学校自治会の仕

事を職員会議の永続的な日程とすることなどである。

## 2 クラブ

生徒の興味に迎合する学校クラブの組織は、教育上のビュリタニズムからはおよそ級の遠い動きであった。形式的な訓練という考え方からすれば、興味とか娯楽とかという側面を持つ活動は学校に存在の場がもてなかつた。厳しい、干からびた非享樂的なものだけがおそらく尊重されたのであろう。しかし、ビュリタニズムの社会的勢力が衰え、学校が大部分の将来性のある青少年を吸収し、さらに教育の有用性という衝撃がカリキュラムに家庭経済、産業技術、その他の実際の領域を付加するようになると、進歩的な教育者は、スケージュールに生徒が興味に没頭する時間をつけたしたのである。能率的な行政家は、完全な活動の時間を組織して、生徒クラブの細かい規則をもうけ、教壇の上の話し手は、カリキュラムと教科外活動との関係と相異を巧みに話した。すべての生徒はクラブに籍をおかなければならず、すべてのクラブは教師を顧問にしなければならなかつた。一方では、行政命令と専門的な刺激によって、すべての教師はクラブを後援することになった。このようにして、学級は青少年の本当の興味・関心をひくものからかけはなされてしまったのである。

ところで学校クラブを検討するには三つの基準がある。

- (1) クラブは非能率的に組織されているか、自発性と興味のすべてのエッセンスがしぼりとられるほど完全に組織されているか。
- (2) その実際の働きは、ときには社会的特性やシエントルマンシップを助長させる性質をもっているか。
- (3) 学校クラブは、一方ではアカデミック・カリキュラムから完全に分離し、他方では形式に課程化・専門化される傾向があるか。

にある。

要約すれば、教育は生徒たちの興味と関連させる場をもつ必要があるように思える。また、学級の中で生ぜしめられた興味を發展させつつけることのできる場が必要であると考えられる。たとえ、いかに教師が生徒の興味に敏感であろうと、また、たとえその課程が柔軟性にとんでいようと、ある生徒は、集団全体のうちの優秀なものに、ゆるされる以上に、一つの活動に多くの時間をつかいたがるであろう。このために学級の中に十分な時間が用意されなければならない。その時間を見つけたすのは、管理者の仕事であるが、その仕事には、有能で熱心な顧問教師を用意すること、興味が真に生徒のものであることを保証すること、活動にたやすく入っていけるように準備すること、それぞれの生徒の学級の仕事とつながりをもっていることを知らせることなどが必要になってくる。

### 3 ホームルーム

生徒の興味にたいする関心が学校クラブをうみだしたと同様に、指導機能の必要がホーム・ルームをつくりだした。学校が大きくなるにつれて、生徒の人格をないがしろにすることが多くなるが、そういうことがある種の制度の必要を感じさせたのである。この制度によって、生徒は学校の中にきまった地位を見つけ、一方おとなたちは学校の機構の中に個々の生徒を適應させるという責任を持つことになった。この他のホームルームの理由は、右の中心の理由につけ加えられたものにすぎない。地域社会は、学校がなんらかの市民性教育をするものだという期待をもっている。この責任がホームルームにかけられたのである。学校の目標は性格形成ということにあるのだが、それが、学校全体のふん開気の中でできないとしたら、学校のある種の単元にそのような責任を果すような工夫が

必要になってくる。ホームルームはこういった仕事の責任も負わなければならない。もし教育が筋道のたたない、偶然的な形のものにならないようにするには、個人的にも集団的にも、学習指導、職業指導、個人的な問題についての指導の形を整えなければならないだろう。ホームルームの仕事はこういった所にあるのだが、その他にホームルームについてのみおこる事柄は次のようなものである。いろいろなスケジュールを作ったり、発表をしたりする組織ないし場であり、生徒会代表の地盤、学校ダンスの出発点ともなる。ところで、たいていの学校はホームルームの時間として、一日一五分から三〇分をとっている。

もしこのようなホームルームの組織や、それが果すべき責任を認めなかったり、回避したりしたとするならば、その学校は公認の仕事をサポートすることになるだろう。だが、このホームルームに対する批判はますます多くなり、ホームルームが姿を消していく傾向にさえある。その理由は「ハッキリしている」というのは、教育者が学校の基本的な目的を達成しなければならないホームルームから、学習内容を切り離すことは不要だと考えはじめているからである。たしかに、ホームルームの欠陥は、学習内容から分離されているところにあるようだ。この欠陥を見とおした行政家や教師は、ホームルームと学級とを合同させはじめている。ここで、つぎのタルサ報告の抜粋をとりあげるのには意味のあることである。

タルサにおいてホームルームが急速にその存在の基礎を失いつつあることは明らかで、その背景には次のような考えが流れている。——社会的、市民的、個人的な諸活動の持っている特徴や価値を利用できるのは、青少年がそのような活動にふくまれている問題にいきいきとした興味を持って、解決にあたるとき、最も効果的なものになる。ところが、こういった問題は当然学級の中におこるものなのだから、学級という自然的な学習の場以外に、なぜ人工的立場を設定する必要があるのか。もし問題が外部からおこったならば、その問題を生徒に興味のある適当な問題として、学級の学習をそれによってな

せいきいきとしたものにならないのか——という考えである。

#### 4 問題解決

教職にかけての熟達者は、直接目的にきりこもうとしていることが、ますますハッキリしつつあるが、論理的に構成された教材群の修得からくる不確かな練習の転位には頼らなくなってきた。ところで、このひろくとりあげられている目的の一つは、関心をもっている問題を知的に考えることのできる生徒を育てあげようという目的である。この問題を知的に考えるという思考過程は、いろいろな名称でよばれている——問題解決、批判的思考、反省的思考、知的思考、科学的思考あるいは科学的手続きの使用などというように。名前はどうあろうと、知的な過程を通して問題——決定、最後に行動という進み方は、のぞましいものだというように考えられている。ウィスコンシン・ハイスクールのエジャートンは比較的簡単な方法を学校にとり入れている。これは、事実を見出す——事実を選択する——事実につかってみる——事実に従う、という四段階からなっている。

もし問題解決法・問題解決過程を使うことが、学級教師個人々人にとってだけの関心事ならば、これ以上考える必要はないのだが、学校生活の特徴を論ずるこの章で問題解決を取扱う理由は、次のようなことがますます明らかになってきているからである。すなわち、目的を完遂するという条件である生徒に事柄を確認し (to use an agreed-on process) ながら進んでいく方法の能力をのばすのに、この生徒に関心をもつ数人の教師が共同してやった時に最もよい結果がえられたということである。オハイオ大学付属学校の教師たちの報告の中でこれに賛成して——

反省的思考を培うということは、一教科領域の特別な責任ではなくて、むしろ、学校のあらゆる領域が関与すべき事柄で

ある。どのような年齢段階でもこのような重要な考え方を貫き通すにはわりだからというので、聡明な決定の延期を必要とするような場所は一つも見あたらない。

ジョン・ブラウン学校の教師は長い間、問題解決能力に関心をいただき、この学校の委員会では早くから、この過程を分析し、これを学習に適用することにつとめてきた。同委員会は次のように報告している。

とくに知的有効性に本来的な教育価値は、われわれが問題解決とよんできた行動形式である。生徒は問題に本来つきもの矛盾をつきとめ、それが矛盾であることを知る。ついでその矛盾を解決するために、広い範囲からインフォメーションを集め、幾つかの仮説をたててこれを検証し、資料にかなった結論を下し、最後に、将来、新しい場面に直面したとき自分の知識をそこにあてはめていく責任を感じるようになる。

この目的のための指導で最も効果をあらわすのは生活問題——生徒に意味のある——をとりあげるときである。これと同じことが、学校の目的は民主主義社会でうまく生活していくのに必要な能力をのばすことにあるのだ、とする教育哲学の結論からひきだすことができる。問題を解決する能力が民主的生活にとって不可欠のものであり、直面する問題を正確に規定する能力が問題解決のための思考過程の一部であるならば、生徒は問題解決の一つの段階として、問題を規定するための実践をしなければならぬ。というのは、現実的に意味のない問題を規定することには生徒は全然興味をもたないからである。

オハイオ州立大学付属学校では、

学習をさせる問題は、生徒の日常の生活経験にその起原をもたなければならず、その問題は、知性の自由な活動ができるような方法で学習されなければならない。

と確信している。

ジョン・ブラウン校報告はこのような点に賛成して、つぎのようについている。

問題解決学習の意味は、生徒が全体的な問題にぶつかるといふことでなければならぬ。生徒にとつて現実的で、彼等にふさわしい興味をみつけることができる場面は、少なくとも学習教材の一部になるにちがいない。

もし全体的な問題がそれぞれの生徒の日常経験からひきだされてきたならば、彼らに共同学習への意欲を刺激することになるだろう。一般に、一つの教科領域におちつくような生活問題は実際にはまれで、たいてい他の領域と関連してくるのだから、生徒が一領域だけからこの問題に関する資料を集めることができるといったような計画の仕事は、科学的方法への欲求を阻止することになる。コア・カリキュラムの発展は命令的なものでなく（それはこの点が強みなのだ）、教師間に協同でなしとげようとする努力がハッキリしているところにあるのである。問題解決は、それが学校全体の特徴になったとき最もよく教えられるのである。

## 5 地域資料の利用

一般にアメリカ教育は、はじめから行為にかけては実りがなかった。それは間接的に生活にふれるだけか、まったくふれないかのどちらかであった。学校で学んだことを実際問題にぶつけたばあい、それが計画的で知的な行為を成就させるようなものでなくなってしまっていた。このような教育の不毛の原因には三つの要因がある。

一つの要因は、コース・オブ・スタディや教材の熟達に教師を没頭させたことである。この没頭ということは、教師が地域社会の生活から部分的に孤立したことの弁護になるかもしれない。

第二の要因は学校機能もっている地域という概念である。学校は青少年をまわす一日無事に保護するのに成功し、騒ぎをおこさないように努力しさえすれば、たいしたことない仕事に、なぜこんなに費用をかけるのだろうかとい

う疑問がおこるにしても、たいていの地域はこういう学校の仕事に満足している。

第三の要因は、現代のアメリカの文化模式が、青少年に立ち、入る余地をいよいよ少くしているということである。彼らが家庭ですることはほとんどなくなっているし、結婚年齢はおくらされるし、する仕事はいよいよ少なくなってきた。

かくして、一つの問題からえられた結論に従って知的に行動するという問題解決の要諦は、アメリカ中等教育に対する恐るべき挑戦であり、きわめて困難な問題となった。学校地域はもちろん、学校環境外の可能な限りの地域の資料を使うことが不可避的な意義をもつようになる。

この地域資料の使用に三つの意味がある。

- (1) 地域は、学級で学習された問題や領域のより大きな実例を提供する。
- (2) 地域の全体であろうと、その一部分であろうと、それは直接的な学習の場をあたえる。
- (3) 地域は、行動の重要な活躍舞台となる。

これら三つの段階の利用をすすめるため簡単な説明をしてみることにする。

- 1 地方の酪農場やその近くの貯蔵所を見学する際、子どもの負担をのそぐために学校バスを使うことは、周知のことである。科学学級は貯水池や発電所をおとすれ、英語学級は市立図書館にいき、数学学級は公共建造物の幾何的証明をなし、社会科学学級はあらゆる方面にのり込んでいく。ここでは、旅行の機会について指摘したのではなく、旅行前の注意深い計画および学習旅行の問のしつけ、旅行記のまとめなどに対する注意を喚起することにある。
- 2 まずはます多くの学校は、地域研究のためにカリキュラムの大きな部分をさいている。普通「コミュニティ・シックス」という名のもとに、第九学年の社会科学を地域研究にあてている。これは本来、第九学年が多くの青少年

にとつて最終の教育経験となるからである。地域研究が教科ごとに扱われることから、より広い領域で、より多い時間をかけ、またそれに必要な旅行をするようになる。この直接的な地域研究はどうしてもカリキュラム全体の問題にまでひろげられなければならないのである。

3 青少年が参加できしかもこれらの活動として適当なものを発見することは、非常にむずかしい問題である。これは多くの教師と洞察力をもった地域の指導者との協力が必要である。デス・モアヌス計画がこの問題に示した成果はきわめて完全なものであった。デス・モアヌス計画は、次のような生活領域にわたって調査がおこなわれた。

- |         |             |
|---------|-------------|
| 1 事業    | 8 文化交流      |
| 2 消費者教育 | 9 就職の機会     |
| 3 教育    | 10 工芸美術     |
| 4 政治    | 11 公共福祉     |
| 5 家庭    | 12 レクリエーション |
| 6 保健    | 13 宗教       |
| 7 産業    | 14 保安       |

この調査には、これらの地域にある機関や事務所の目的や仕事調べられており、その機関や事務所が学校に対して扱うことができる協力やサービスについて次のように述べている。

(1) 機関や事務所は生徒の訪問を許可するか？もし許可するとしたら、一度に何人くらいがいいか？こうした訪問はいつが最も都合がいいか？何職位の生徒がそうした見学旅行から最大の利益をうるか？どの程度の注意を前もってすべきか？

このような見学旅行をまとめるのにどんな人々を呼んだらいいか？その人の家の電話番号は何番か？

(2) その機関では、その機関の仕事の説明する人を学校に派遣することができるか？どのような専門領域で、このような人

の話が役立つか？このような人はどの位の年齢集団なら適当なのか？たれと一しよにまとまりをつけていけばよいのか？

(3) 機関はその仕事の実物による教材ができるか？それはどのような形であるのか？これらの実物を学校に送ることができるか？たれと一しよにまとまりをつけたらいいか？

(4) その他の視覚教材で役立つものがあるか？それはどんな性質のものか？どのくらいの費用がかかるか？

(5) 生徒は、どのような方法でその機関の仕事に参加できるか？

このような形でおこなわれた調査の結果が複写され、ハンドブックの形でデス・モアヌスの教師たちに利用された。